

臨江閣

群馬県前橋市

風に舞う淡い花びらの向こうに、鈍く銀色に光る木組みが顔を出す。利根川のほとりに佇む臨江閣である。視界を埋める桜の華やかさとは対照的な、静かな時の堆積に包み込まれるような感覚に陥る。そこにあるのは、現代から地続きにつながる明治の息吹そのものだ。

1884(明治17)年に竣工した本館は、木造2階建て、入母屋造の瓦葺き。初代県令・楫取素彦が提言し、要人をもてなすための迎賓館として築いた。当時の人々が「外から来る客」をいかに尊び、背筋を伸ばして迎えたかという気概が、今も梁一本、釘隠し一つにまで宿っている。特に、明治天皇をお迎えした「御座所」に立つと、精緻な組子細工や選び抜かれた木材の質感が、当時の人々の緊張感と敬意を伝えてくる。一世紀半近い歳月を封じ込めたような造作は、まるで昨日のこのように生々しく、当時の吐息が今、目の前で白く立ち上るような錯覚さえ覚える。

何より心を捉えるのは、歳月に洗われた木の「柾目」の深さだ。縦に真っ直ぐ通ったその筋は、雨風に耐え、この場所の出来事を転写し続けてきた「記録媒体」のように見える。1910(明治43)年に増築された、同じく木造2階建ての別館へと歩を進めれば、180畳の大広間が放つ圧倒的な余白が、また異なる時代の重みで迫ってくる。桜が咲き誇り、やがて散り急ぐその一瞬の傍らで、臨江閣は都市の喧騒を遠ざけ、変わることはない空気の層を静かに守り続けている。ここは、失われつつある「確かな時間」に触れるための、大切な入り口なのだ。



庭園の静寂に溶け込む茶室は、本館と同じ年の1884(明治17)年に完成したとされる木造平屋建ての書院寄棟造りだ。京都の職人の手による簡素な設えの中に、計算し尽くされた光と影が同居する。かつて賓客たちが一服の茶を介し、時代の変遷をどのような想いで見つめていたのか。時を止めたかのような佇まいは、今も伝統文化の神髄をアーカイブとして静かに伝えている



庭園



本館



別館2階大広間